

# 2014年度自己点検・評価報告書(シート)

## 【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

### 《大学》

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

#### I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	総合政策研究科
大項目	6 教育内容・方法・成果 (研究科)
中項目	6.4 成果
小項目	6.4.1 教育目標に沿った成果が上がっているか。
要素	学生の学習成果を測定するための評価指標の開発とその適用 学生の自己評価、卒業後の評価(就職先の評価、卒業生評価)
小項目	6.4.2 学位授与(卒業・修了判定)は適切に行われているか。
要素	学位授与基準、学位授与手続きの適切性 学位審査および修了認定の客観性・厳格性を確保する方策(院)(専門)

#### II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

##### 《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
- B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
- C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
- D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 博士前期課程の院生の研究に対して、複数あるいは他領域の教員からコメントできる発表の機会を年2回程度設けること、また発表へのインセンティブを与えうる仕組み(発表の義務化など)も導入することを、2010年度中に検討した上ですみやかに実施に移す。	→前期博士課程院生の学内研究発表機会(ワークショップ等)の開催回数	B	B	A	A	A
2. 博士後期課程の院生の研究に対して、発表の機会を年2回程度設け、発表へのインセンティブを与える仕組み(奨学金の充実化など)を2010年度中に検討したうえですみやかに実施に移す。	→後期博士課程院生の学内研究発表機会の開催回数および学会での発表回数	B	B	B	A	A
3. 博士前期課程・後期課程の院生1人当たりの学術雑誌等での論文刊行数を、2013年度までの5年間で1.5倍にする。	→前期博士課程院生および修了者、また博士後期課程院生による学術雑誌論文刊行数	C	C	C	B	B
4. 修士論文の質を改善するための仕組みを2010年度中に検討し、実施に移す。	→前期博士課程院生の修士論文の成績評価の平均点	C	C	B	B	B
5. 博士論文の質を改善するための仕組みを2011年度までに検討すると共に、博士論文提出までの基準をより明確にする。	→後期博士課程院生による査読付き論文の刊行数	C	C	B	B	B

☆

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
	→					
	→					

##### 《進捗状況(達成度)報告》 担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	A	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか リサーチ・プロジェクトでは分野の異なる複数教員の指導を受け、研究テーマについて多角的な視点から議論することができる。また2012年度からリサーチ・フェア、リサーチ・コンソーシアムでの発表を義務化することにより、さらに多くの教員から指導を受ける制度を確立している。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 前期課程の学生に対し、研究発表を義務化することにより、研究水準が上がった。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 今後さらにマスターセミナーにおける指導も含めて、発表の機会の確保に努め、論文の質の向上をめざす。	☆
		その他	☆

目標2	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 博士後期課程の院生がより多くの研究発表の機会を持てるように旅費の助成制度を充実させた。また海外において研究発表をするために旅費助成制度が海外渡航費および滞在費もカバーできるようになっている。また、この助成制度は野外調査などにも適用される。2013年度は4名の大学院後期課程の学生がこの制度を利用して、研究発表、野外調査をおこなった。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 後期課程の大学院生がこの制度を利用し、学会での研究発表をおこなった。この制度が発表を促進したことはたしかである。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 今後大学院生にこの制度について情宣するとともに学会発表を促進してゆく。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標3	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 博士前期課程の修了生は「院生論文集修士論文特集号」で修士論文の概要を発表することを奨励し、2012年度は修了生全員が発表した。また博士後期課程の院生は2012年度国内、国外の学会および主要な研究会で4件の口頭発表をおこなった。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 2013年度に関してはまだ成果の発表はおこなわれていない。博士後期課程の学生に関しては国内、国外の学会および主要研究会で9件の口頭発表をおこなった。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 今後は院生論文集への発表を義務化することも含めて検討が必要である。博士後期課程の大学院生の発表に関しては今後も現状を維持するようにつとめる。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標4	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 2012年度に続き2013年度も修士論文口頭試問では前半を公聴会とし、主査・副査以外の大学院教員、大学院生などが参加できる状況で論文の口頭発表および質疑応答をおこなった。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か この制度もようやく定着し、成果を上げている。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 公聴会への参加者がまだ十分ではなく、さらに多くの大学院教員、大学院生が参加するように努める。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標5	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 博士論文の審査基準についてはディプロマ・ポリシーで入学生に周知させるとともに、①サーベイ論文の審査②博士論文概要書の審査③博士論文の審査、という博士論学位取得プロセスを公表している。また2011年度入学生以降には博士論文提出用件として、3本以上の査読付き論文の刊行を義務づけ、外部機関の審査という客観的基準を取り入れることにより、博士論文の質の向上をめざしている。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 博士論文の質的向上が見られた。博士学位取得プロセスもディプロマ・ポリシーの公表によって、より明確になった。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か この制度を今後とも続けてゆくことにより、さらなる博士論文の質の向上をめざす。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
備考			☆